

---

# 箱庭境界

hk

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

箱庭境界

### 【コード】

N9987T

### 【作者名】

hk

### 【あらすじ】

面倒くさがりな人たちの中で子どもが大人になる話。 シリアス。

「無痛分娩にしてよかったわ」

本宮千奈美はほっと息をついた。

自分の体が日に日にカンガルーのようになっていったときは本当に恐ろしかった。その先にドラマや映画などでおなじみの、戦争まがいの出産があると思えば、逃げ出したくてたまらなかった。

そんな苦しみももう終わり。局所麻酔のおかげで痛みが……まったくくないわけではないが、思い描いたほどではなかった。

「医学の発達つてすごいわね」千奈美はさっそく赤ん坊を腕に抱いた。

「猿みたいだな」夫が笑いを含めて言う。

千奈美はなんだかかんに障った。

「赤ちゃんはみんな可愛いわよ！」

そう言つて我が子の顔をのぞき込んだが、猿みたいだった。

「名前は日光かな？ 猿軍団」

千奈美は口元をむずむずさせた。が、数秒ももたない。

「日光、日光」

面白がつて呼んでいるうちに、出生届でも日光になった。

「なんとかならないのか？」

本宮郁雄は努めて平坦な口調で聞いた。

郁雄のここ数日の望みはただ静かに眠ることだけだった。

夜泣きだけでも充分参っているのに、妻のヒステリーまで上乘せされたらたまったものではない。

「……あのねえ、おっぱいあげたし、おむつ替えたし。頭なでて子守歌歌つて、これ以上何しろつていうのよ。あたしだって全然わからないんだから」

露骨なため息が耳に付いたが、郁雄は気にしないことにした。

「ああ、そつだな。ごめん。俺が悪かった。大人しく寝るよ」  
さつと布団に入り直すと、ゼロ秒で目を閉じる。  
逃げるが勝ちというやつである。

といつても赤ん坊の泣き声は強烈なので、さしもの睡魔もそうは勝てない。

翌日から勤務時間中、郁雄は途端に頻尿になった。トイレに行つてきます、イコール、五分寝てきます。

オフィスの空気が険しくなつていくのを五日間ほど味わつてから、郁雄はついに妻に言った。

「『十戒』つていう映画知ってる？」

うじゃうじゃいる民衆が砂漠をぞろぞろ、海が割れてジャジャジヤーン！　すごいぞモーゼ。モーゼすごい。

郁雄は子どもの頃、たいそうなスケールだと思つてその映画を見ていた。

その他の印象は特にない。

ただ、ひよっこり思い出したのが、赤子を川に流すシーンだった。モーゼがなぜ川に流されたのか、郁雄はまったく思い出せなかつたが、流した人間の気持ちはわかるような気がした。

流れついた先で良い子になれよ……！

桃太郎だつて川を流れてきたのだ。これはいけるに違いない。

郁雄は持ち前の適当さでそう思った。

子どもを育てる大変さは色々としミュレーションしてきたつもりだった。

けれどもやはり現実には厳しいといおうか、数日間はこの体たらく。これから先のことを考えると、郁雄は途方に暮れるしかなかった。自分たちは子どもを持つことに向いていない夫婦だった。なら、向いている夫婦にもらつてもらつた方が、この子にとつても幸いだろう。

それは至極もつともな結論に思えた。

本宮千奈美は『十戒』を知らなかった。  
タイトルだけは知っているが、いかにも堅苦しくて宗教くさそうな印象だったので、見ようと思ったことはなかった。

夫の話は半分以上聞き流してもだいたいは理解できる。つまりは子どもを手放したいということだ。

どうしようか。千奈美は考えた。

夫の両親は他界しているので、その辺は配慮する必要がない。つきあいが面倒なので、わざわざそういう相手を選んだのだ。

しつこくないし、うるさくもない。長い人生を共に生きるには良い相手だと思っている。

自分の親も、離婚相手の娘からようやく解放されたところなので、今さら孫がどうのと気にしたりはしないだろう。

となると問題は一つしかない。

「……近所の人に子どもいるの見られちゃったわよ？」

千奈美は夫の顔色をうかがった。

夫はうなずいた。

「じゃあ、川はやめて養子に出そう」

「悪いけどあきらめてよ」

川上由香子は言い切る前に電話を切った。

母さんはいつになったらわかってくれるんだか……。

三十代突入。彼氏なし。処女。投げやりナチュラルメイク。言い換えれば、ほぼノーメイク。

結婚どころか恋愛だのセックスだのには一切関わりたくないのだ。疲れそうだから。

なのに連日かかってくる「早く結婚しなさい」。

由香子は母親の涙声にうんざりしていた。

また電話だ。

いっそ着信拒否にしてやりたい……と思ったら、今度は友達から

だった。

「千奈美？ どうしたの？ え？ 子ども？ 猫かなんか？ へ？  
あんたの？ いるかいらないかって、そんなの」  
いらぬ。

いらぬに決まってる、が、由香子はピンときた。

母親がなぜあんなにうるさいかと言うと、孫がほしいからなのだ。  
孫、ようは赤ん坊。渡りに舟とはまさにこのこと。

「ありがとー！ これで解放されるわー！」  
由香子は諸手を挙げた。

「どういうことなの……」

川上千鶴は気が遠くなりそうだった。

娘がいきなり「孫をもらってきた」と言っつて赤ん坊を連れ帰ったのだ。

思わぬ娘の腹を凝視すれば、カラカラと笑われる。

「やーねー！ あたしが産んだんじゃないわよ。友達の子！ いらぬいっつて言うから、もらってきたの」

「いらぬいっつて……あんた……」

「やっぱり赤ん坊育てるの大変だったつて。可哀想だからいい人にもらつてほしいっつてことで。母さんずつと孫ほしがつてたでしょ？」

「……私ばあんなの子どもが見たかつたのよっ」

「無理だし！」

あまりにもあつげらんかんと言うので、千鶴は返す言葉がなかつた。  
娘とはこれまでも話し合つてきて、結婚する気がないのはわかつた。  
ていた。

けれども、たった一人の娘だ。どうしてもあきらめきれなかつたのだ。

しかしこんな暴挙に及ぶほど追いつめていたとは気づかなかつた。  
いや、追いつめられたからといって、こんなことをするものだらうか？

過労で先立ってしまった夫同様、働きづめでろくにかまっていられなかったという負い目がある。

娘の気持ちがわかるなどと、一度も自惚れたことはない。しかし……。

千鶴は娘の笑顔を直視できなかった。

腕の中の赤ん坊は泣きわめいている。

どうしてもと、件の両親に電話をかけてもらったが、何度確かめても答は同じ。この赤ん坊に行き場はないらしかった。

千鶴は頭がクラクラしたが、なんとか子どもの名前を聞いた。

名前は日光。

……いい名前なのに。

突然できた孫は男の子だった。

「……そうですか、わかりました」

川上日光はそれ以上言わなかった。

千鶴が「本当の両親のことは知らない」と言うなら、それ以上言えることはなかった。

日光は幼稚園の頃から「あなたはうちの子ではない」と言われて育った。

初めて言われたのは、『由香子』という名前を覚えさせられた日だ。

「母さんってばー、まだ言ってなかったの？ こういうのは最初に言っておかなくっちゃ。あとでグレたりするのがよくあるセオリーってもんじゃないの！」

そしてなんてことのないことのように、けろりと、「あんたは養子なの」と言った。「養子っていうのはね……」

なら、本当の親はどこに？

混乱と衝撃でつつかえてしまったその問いを、今ようやく口にしてみたら、これだ。

嘘をつかれているのはすぐにわかった。

「この育ての親は罪悪感にさいなまれたとき、顔色を隠すという」とをしない。

言えないような親から生まれたのだ、つまりは。

しかしそれがなんだろう。

日光は充分に味わった。

世の中は簡単に同情を示してくれる。

可哀想に。でも引き取ってもらえてよかったね。頑張れと。

慰めまでもつけてくれる。

簡単に、簡単に。

「……そうですね、わかりました」

とても簡単なことだった。

「……どうしたらいいのかしら」

川上千鶴はため息をつく。

赤ん坊だった日光は高校三年生になった。自分は七十を越え……もうすっかりおばあちゃんだ。

二度目の子育てが上手くいっているのか、千鶴にはほとんど自信が持てなかった。

そんなものは日光がつれてこられた時点で残らず吹き飛んでしまっていた。

「……どうしたらいいのかしら」

カーテンのかかった本棚は子育ての指南書であふれている。不格好に膨らんでもまだ買ってしまふのは、同じ育児本であるにもかかわらず、それぞれ違ったことが書いてあるからだ。

ある本には「今の時代だからこそ子育てには厳格さが必要」といったことが書かれてあるし、ある本には「理解を持って育てれば子どもは自分でわかってくれます」といったことが書かれてある。

千鶴だってケースバイケースという言葉は知っている。親子の関係によって何通りもの正解があるだろう。

しかしどれが自分たちの正解なのか、どうやったらそれを確かめ

られるのか……。

日光はもう高校を卒業しようとしているのに。

乳幼児から中高生までの指南書を読み返しながら、千鶴は今日の献立を考えていた。

好き嫌いの把握・栄養のバランス。そんなことでさえ、何か取り返しの付かないことのように思うのだった。

「えーっと……ごめんな」

山下翔馬はおとなしく頭を下げた。

相手は幼なじみなのだが、今やそんなことは関係がない。

廊下でちよつと肩が当たっただけでも、謝っておいた方が得策だ。川上日光という男は、知る人ぞ知る問題児だった。

といつても、実際に問題を起こしたことは一度もない。普段はむしろ誰よりも優等生でガリ勉くんだった。

なのになぜ誰もが避けて通るかというのと、この男の沸点がわかりづらいことにある。

いつもは物静かな男が、突然キレる。何かしらきつかけはあるのだが、法則性はわからない。川上日光が丁寧に解説してくれたことはない。

手に負えないのはそのキレ方だ。相手の目を定規で突こうとしていただとか、いきなりカッターをチラつかせて脅してきたとか。どこまでが本当かは知らないが、今時の草食系男子にとってはチビっちやいそうになる存在なのである。

番長なんて用語はもはや古文書の彼方。教師の目の届かないところでは、暗黙の了解だけで時が流れている。

翔馬がとった対策は大多数の生徒と同じ。実にシンプルなものだった。

関わらない。近づかない。

はたして、川上日光は何も言わずに通り過ぎていった。

その動かない表情は、霞がかつた思い出とはこれっぽっちも重な

らない。

翔馬は卒業までの日数を数えて、なんとなく廊下を蹴った。

「あれ？ まだ知らなかったの？」

川上由香子は呆れてしまった。

大学を卒業し、就職までした義理の息子に、今さら実の親の居場所なんか尋ねられるとは思わなかったのだ。

そんなものはとくに教えられていると思っていたし、幼気な子どもでもあるまいに、いつたいなんの意味があるのかわからなかった。

久しぶりに会った息子は表情に乏しく、見るからにとっつきにくい人間に育ったようだった。

由香子はその顔つきをじろじろと見て眉をひそめた。

「ちよつとー、めんどくさいことやめてよー？」

「……それは、例えばどんなことですか？」

「なんでボクを捨てたんだよー、とか、メロドラマみたいな。千奈美はあんたを捨てたんじゃないわよ。あたしにくれたんだもの」

「……俺も就職しましたから、はじめとして挨拶しておきたかったです」

「なに？ 結婚でも考えてるの？」

「いえ……」

「相手作る気があるならさっさと作っとかないとするさいわよ。母さんが」

嫌な思い出が頭に浮かぶ。これからって子は大変よねーなんて、由香子は考えた。

「俺にはそんなこと一言も言いませんよ」

「ふーん？ 母さんも変わったもんね。でも、もっと早くわかってくれたらよかったのに」

「そうでしょうね、わかっています」

川上日光はうつすらと笑みを浮かべた。

ベッドの上でぼかんとしているマヌケな男は、一昨日手術を終えたばかりらしい。

「大腸ガンって再発の可能性が高いらしくてまいったよー」などと、初対面の相手にも遠慮のない男。

髪に混じった白髪は多く、想像よりも老け顔の。

筋張った手で頭をかきながら、「えーっと、俺の見舞い？ に、来てくれた……んだよな？」なんて、見舞客の顔が記憶にないことをごまかした。

「日光という名前に覚えはありますか？」と口に出す前から、答はずでにわかっていた。

「へ？ えーっと、猿軍団の？」そんな言葉で返ってきたのは予想外だったが。

わかっていたことを確かめただけだったので、日光は何一つ失望することがなかった。

「それじゃあ、お元気で」

「……日光」

「っ」

「昔、そんな名前の子どもがいたなあ」

日光は振り返らずに言った。

「……昔、ですか？」

「あー……。今は立派になって、幸せになってるはずだから」

「……なぜ？」

「ダメな親から解放されたからね」

「そうですか」日光は声帯を引き絞った。

「……さようなら」

最後の一音まで、声が震えぬように。それが限界だった。

日光は乱暴な音を立てて病室を出た。

参観日も、運動会も、音楽会も。

あの男が顔を見せたことは一度もない。正体不明の手紙なんて一切なかったし、匿名希望のプレゼントなんてありえなかった。

子供心に思いつくすべての生活において、実の親の影なんてものが出てきたことはまったくない。

大昔には、育ての親が気を使っているのかと思っていたくらいの清潔さだった。

……それもそのはず。

日光はくつくつと笑いながら家路についた。

昔から家は憂鬱のすみかだったが、最近はとみに帰路の足が重くなってきていた。

一週間後にはアパートに入居すると決まったものの、今はまだ育ての親と顔を合わせなければならぬ。

しだいに背中が曲がってきた川上千鶴を、日光はこれ以上見たくないなかった。

目を背けられているかのようにイライラするし、死に水を取る役目などまっぴらだった。

そんなことは、実の娘がすることだ。

日光は玄関を開けたらすぐに自分の部屋に入るつもりだった。しかし。

「……お帰りなさい、日光」

待ちかまえていたかのように、千鶴が廊下に立ちつくしていた。

「……どうか、しましたか？」

千鶴の瞳がさまよう。

「……由香子から、連絡があったのよ。……なんでもっと早く教えておかなかったのかって」

日光は内心で舌打ちをした。

「気にしていません」

「日光……」

「気にしていません。すんだことです」

千鶴がはつと息をのんだ。

「……会ったのね？」

「……会いました。何か？」

「日光……」

名前を呼ぶのは千鶴のくせだ。

正確には、何か言おうとして、結局何も言わないのが常なのだ。

日光は奥歯を噛んでそれを待った。

一秒、二秒。

常ならぬことが起こった。

「どうして……っ」

千鶴が泣いている！

日光の体はビクリと後ずさった。

ところが、涙声で続いたのは突拍子もない言葉。

「い、家を出るならっ、早く良いお嫁さんを見つけて、結婚しなさい……っ。将来はどうする気なの？ 子どもを持つなら、あのアパ

ートじゃっ」

「……何を言い出すんです」

千鶴はきつと日光をにらみつけた。

「あなたは私の子どもです。……私は良い親じゃあないでしょう。

でも、あなたは私の子です！ あなたの奥さんも、あなたの子ども

も川上姓です。本宮は名乗らせませんからね……っ」

日光はあつけにとられていた。

目の前の頭髮は白く、昔に比べると随分と薄い。そんな兆候はな

かったが、ついにボケが始まったのかと思った。

「……由香子さんも、たまには来てくれるでしょうっ」

「由香子是由香子、あなたはあなたでしょうっ」

「しかし……」

「今さらどうして取られなきゃいけないのっ！」

「取る、って」

「取る、って」

言葉が出ない。

この育ての親がこんなにも取り乱したところを見せるのは初めてだった。

老女が感情をむきだしにして泣きわめく様は、まちがっても美しいとは言えなかった。

それでも日光は時間を忘れたようにそれを見ていた。

……何分も、何十分も。

ぼかんとマヌケ面をさらしたまま、育ての親がまきちらす駄々を残さず耳におさめて。

そうして、他のことは何もかも忘れてしまった。

「本当にいいのか？ おまえだっていずれば必要になるだろ？」

山下翔馬は最後の確認をした。

ダンボール五箱にもなった育児本は、定価に直せばかなりのものだ。

日光は気にするなと、虫でも追い払うように手を振った。

「んなもん頭でつかちになるばかりで、たいして役に立たないぜ。

お袋なんか黒歴史扱いしてるからな。神託じゃあるまいし、結局は自分で判断してやるしかないさ」

「うー……。けどなあ、うちのかみさん、もう産む前から育児ノイローゼなんだって！ 俺がついてるっつーのに、自分なんか立派な母親になれるのかって、毎日毎日……っ」

「おまえから本なんか渡したら、余計プレッシャーになるんじゃないのか？」

「けど今は知識詰め込んで安心したいらしいんだよ。……そうだ！ おまえが直接手渡してくれよ、いらないからって言ってさ。おまえも今から妊婦に慣れといた方がいいだろ？ な？」

日光が仕方なさそうにうなずくのを見て、翔馬は満面の笑みを浮かべた。

川上日光に再会したのは半年ほど前。なんてことのない、ただの

同窓会で。

翔馬は目の玉が飛び出るほど驚いた。

そもそも同窓会に出席する気があっただけでも驚きだったが、日光の雰囲気が一変していたのだ。

高校を卒業してから何があったのか、聞いてみても肩をすくめて笑っただけで、答は返らない。

でもきつと良い出会いがあったんだろう。

翔馬はそう思った。

そして、幼稚園から高校まで一応の縁があった相手にもかかわらず、自分がきつかけになれなかったことを今さらながら惜しく思った。

「つーか、おまえもさー、ベッドでの仕事ももつと頑張れよー！薄いんじゃねーの、もしかして」

「……うるせー。おまえな、お袋が向こうで茶の用意してんだぞ。そういうこと言うな」

「って、殴ることたねーだろっ」

たわいない下ネタを投げつけて、肘でつついて。学生時代を取り戻すかのように、笑っ、笑っ。

自分の子どもと日光の子どもは、きつと親友同士になるだろう。

「けどまあ、お袋もよぼよぼだし、あいつも欲しいって言ってるし、早く作ってやりてーな」

すっかり無表情を置き去りにした日光を見て、翔馬はぽつりとつぶやいた。

「……おまえ、ホント変わったよなあ」

つぶやきは小さすぎて、日光には聞こえなかったようだった。

山下翔馬は考える。

万が一こいつがまた荒んでしまうことがあったら、今度は殴つても引き留めてやるっ。定規とでも、カッターとでも対決してやるっ。

「俺も変わったかなあ……」

翔馬は一人で照れてしまった。

「日光、翔馬さん、お茶飲んでちょうだいね？」

「あ、はい！ どうも」

翔馬は慌てて会釈した。

「お袋、運ぶときは声かけてくれって言ったろ！」

「いやあね、お茶出したくらいでぎっくり腰にはならないわよ」

「はあ……。山下、この後すぐ本持って行くのか？」

「おー、良かったら頼むー！」

「ちよつと待て。妻も呼ぶから」

「おお……！ ぜひ頼む！」

そして。

「……うわ。もうこんな時間か」

……山下夫妻が案外しつかりとした親になりそうなこと。

義母が子どもはまだかとせつについてくること。

妻が色気を気にして迷走していること……。

今日が、とても楽しかったこと。

時計を眺め、まぶたをこすって。一つ一つを思い返しながらくつきりと。世界は狭く、深くなる。

エジプトで疫病が流行っても、鬼ヶ島で鬼が暴れても。勇者ならざる身であれば、なべて世はこともなし。

めでたし、めでたし、と。

川上日光はゆっくりと日記を閉じた。

(後書き)

「ない」「あり得る」「ある」のラインが、なるべく優しいところにあるといいですね。

無痛分娩については、単にこの登場人物が(痛い怖いという理由で)選びそうな出産方法だっただけで、批判の意図はありません。どんな理由でどんな分娩をしようが、ちゃんと育ててたらそれいいと思います。

養子については、由香子が日光に教えた時点では「引き取って育てている」だけで、手続きはしていません。千鶴は一刻も早くしたがりでしたが、本宮夫妻が面倒がりました。(相続のことは考えない)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9987t/>

---

箱庭境界

2011年9月8日03時21分発行